2017年度

国語

（問題）

<H29112081>

注意事項

一　試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

二　問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

三　解答はすべて解答用紙の所定欄に、ＨＢの黒鉛筆またはＨＢのシャープペンシルで記入すること。

四　受験番号および氏名は、試験が開始されてから、解答用紙の所定欄に正確に丁寧に記入すること（左の記入例参照）。所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。

五　受験番号の記入にあたっては、左の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。読みづらい数字は、採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

（記入例）

５７００１番

⇩

万	千	百	十	一
5	7	0	0	1

（数字見本）

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

六　解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

七　試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き、解答用紙を裏返しにすること。

八　いかなる場合でも解答用紙は必ず提出すること。

九　試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

一般に、特定の人物のみに寄り添って語る視点を一人称的視点、全体を俯瞰（ふかん）するように語る視点を三人称的視点という。このいずれの人称で語るか、というのは、実は①小説全体をつかさどる叙述主体の「資格」にかかわってくる問題でもある。

Ⅰ　の『小説神髄（しんずい）』（明治一八～一九年）の刊行前後から、西洋のノベルの訳語に「小説」の語を宛てるのが次第に一般化していくのだが、小説の中に西洋語の基底にある「主語＝語る主体」をどのような形で取り入れていくかというのは、実はなかなか難しい問題なのだった。仮に世界をある一つの立場から統括し、整合的に語ることが可能であり、なおかつそのように努めなければならない、と考えるところに「近代」という時代の理念があったとするなら、こうした理念のもとでは、誰がどのような立場で語るのか、という「資格」が厳しく問われなければならない。仮に一人称的視点で語り始めたならば、それは最後まで一貫していなければならず、その人物に見えないはずの世界が描かれることがあってはならぬのである。たとえば漱石の『坊つちゃん』（明治三九年）は坊っちゃんの自己語り（一人称）なので、彼のいないところで赤シャツ（教頭）たちがどのような密議をこらしているかは、読者も知ることはできないわけである。

A

これに対し、日本の散文芸術（和文体）の歴史をふりかえった時、こうした制約からは基本的に自由である。物語にせよ、軍記にせよ、時に現場に密着したある一人の人物から語られているかと思うと、次の瞬間には全体を俯瞰する、全能的、パノラマ的な視点に切り替わっていたりもする。語る「資格」を厳密に考えると矛盾だらけになってしまうのだが、これをさして不自然に感じないのは、そもそも「人称」という概念自体が存在しなかったからなのだろう。

B

近代の小説は西洋一九世紀以降のリアリズム小説の手法を実現しようと試みる中で、「人称」という概念にあらたに出会い、その発想をどのように取り込んでいくかをめぐって展開されたaシコウサクゴの歴史でもあった。伝統的な和文体の利点を生かしつつ、なおかつ小説全体を統括する主体を創生するには、はたしてどのような工夫が必要だったのだろうか。

C

日本語の特色を語る際にしばしば引き合いに出される例に、Ⅱ　の『雪国』（昭和一二年）がある。小説は「国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた」という著名な文章から始まるのだが、そもそもこの一文の主語は何なのだろうか。「国境」でもないし「トンネル」でもないし「雪国」でもない。『雪国』はその冒頭の第一行から、主語の明示されない不思議な文章から始まっているのである。

D

たとえばサイデンステッカーはこの部分を英語にする際に、“The train came out of the long tunnel into the snow country.”（列車は雪国に向け、長いトンネルを抜け出した）と翻訳した。いわば雲の上から下界を見渡す三人称的な視点である。だが日本語の実感としては、“the train”（列車）を主語にすることにはかなりの違和感をともなう。この場合、観察する主体は②下界を超越した立場にいるのではなく、刻一刻現場を移動しながら読者に情景を報告する、実況中継者と考えるべきなのではあるまいか。

この点に関してたとえば熊倉千之は、この場面を汽車に乗って観察している「私」の、「私」的時間の表出と捉え、“Hanako is sad.”という一文を例に興味深い考察を行っている（『日本人の表現力と個性　新しい「私」の発見』一九九〇年）。「（誰から見ても）花子は悲しい」という客観的事実を前提とする西洋語に対し、日本語の場合は「（私が思うに）花子は悲しい（悲しそうだ）」という形で、③一人称の語り手の判断が叙述に潜在している点にその特色があり、日本語の時制が一見曖昧に見えるのは、物語内容が語り手の心理的な「現在」に取り込まれて語られている点にその一因があると言うのである。

ここで仮に、場面に潜在するこうした「私」が、叙述の中で自在にパフォーマンスを繰り広げ、ある時は「一人称的視点」をよそおい、またある時は「三人称的視点」をよそおっている、と考えてみてはどうだろう。『雪

国』は場面に潜在する「私」の機能を生かし、一見三人称の形態をとりながら、実況中継的な視点を演出してみせることに成功した一つの例である。④いわば黒子のように、必要に応じて読者と作中世界とをつなぐ「私」をいかに機能させていくかに、日本語の言文一致体小説の成功がかけられていたわけである。

おそらく文学の歴史の中で、近代という時代ほど「客観性」が重要な価値としてbショウヨウされた時代もほかにはなかっただろう。言文一致体の利点は、なんと言ってもその平明な「わかりやすさ」にあったのだが、これと並び、当時しばしばその長所とされたのが、記述の「正確さ」なのだった。この文体が一般化したのは西洋の自然主義の文学理念が日本に入ってきた時期でもある。自然主義の「自然」は「自然科学」の「自然」のことで、近代科学が発達した現代の世において、文学もまた科学的な裏付けがなければならない、という発想がその背後にあった。そこで重視されるのは、物事を正確に写し取っていく写実主義の考え方で、こうした機運の中で、⑤言文一致体は日常のできごとを〝ありのまま〟に描写していくのにもっともふさわしい手立てであると考えられたのである。

（安藤宏『「私」をつくる　近代小説の試み』の文章による）

問一　傍線部a「シコウサクゴ」、傍線部b「ショウヨウ」のカタカナにあてはまる漢字を**楷書**で記せ。

問二　空欄 Ⅰ と空欄 Ⅱ には人名が入る。その組み合わせとして適切なものを、次の**ア**～**カ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　Ⅰ　高山樗牛　　Ⅱ　永井荷風　　**イ**　Ⅰ　高山樗牛　　Ⅱ　芥川龍之介
ウ　Ⅰ　坪内逍遙　　Ⅱ　川端康成　　**エ**　Ⅰ　坪内逍遙　　Ⅱ　芥川龍之介
オ　Ⅰ　二葉亭四迷　　Ⅱ　永井荷風　　**カ**　Ⅰ　二葉亭四迷　　Ⅱ　川端康成

問三　傍線部①「小説全体をつかさどる叙述主体の「資格」」とあるが、これに対する説明としてもっともふさわしいものを、次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　近代小説では、叙述主体が立場の取り方を工夫することで、語られるべき事実を隠蔽することも可能であるということ。
イ　近代小説を語る視点は一貫している必要があり、叙述主体がどのような立場から内容を統括するのかが重要になるということ。
ウ　小説の語り手は一人称的視点と三人称的視点の双方を兼ね備えるものでなくてはならないということ。
エ　小説の中に主体を取り込むことは困難であり、叙述主体たる作家には相応の技術と経験が必要になるということ。
オ　小説を語る叙述視点の選択は、小説内の人物造形とも深く関わり、近代的な倫理観を共有しない主体に視点を置くことはできないということ。

問四　次の一文が入るのにもっともふさわしい箇所を、本文中の A から D の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

一つの文章の中で主語が入れ替わることすら珍しくない和文脈においては、あるできごとに関してさまざまな立場からの心理や解釈を併走させる、その融通性にこそ〝客観〟の根拠が置かれてきたのである。

問五　傍線部②「下界を超越した立場」とあるが、「下界を超越した」を言い換えるのにもっともふさわしい語句を本文中から**七字**で抜き出せ（句読点などがあればそれを含む）。

問六　傍線部③「一人称の語り手の判断が叙述に潜在している」とはどういうことか。これに対する説明としてもっともふさわしいものを、次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　日本語は、文の省略が自由であるために、語り手にとって当たり前な一人称の主語は省略されているということ。

イ　場面の裏に身を隠している「私」が、作中人物の傍らに寄り添うようにして、特権的な立場から情況や心理を描くこと。

ウ　「私」が場面に登場していないときであっても、その都度作中人物に乗り移って、正確な情報を読者に提示すること。

エ　日本語の文は、主体の人称がどのようなものであっても、主体の一人称への共感にもとづいて叙述されているということ。

オ　「私」がその場面に登場しているか否かは関係なく、作者から語りの資格を与えられて、写実的に小説の世界を語ること。

問七　傍線部④「いわば黒子（くろこ）のように」とあるが、これは「私」のどのようなあり方を示しているか。もっともふさわしいものを、次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　黒子がそこに存在しながら、見えないものとされているのと同様、日本の近代小説では「私」の存在は、叙述全体の視点と矛盾しながらも、約束事として機能しているということ。

イ　黒子が見えないところで物語を動かすのと同様に、視点者から見えない出来事の場合には作者の「私」が推測しつつ語ることになるということ。

ウ　黒子が身を隠しつつも舞台上に存在するのと同様、日本の近代小説の「私」は、時には語りの資格を与えられて作品の表舞台を盛んに動き回るということ。

エ　黒子が常に主役の背後にあって、劇全体を動かすのと同様に、日本の小説では「私」が常に文章の背後にあり、さまざまな視点をよそおいながら叙述を進めているということ。

オ　黒子の顔が見えないのと同様に、日本の近代小説の叙述主体の「私」は不特定で、特定の登場人物に重ねられることはないということ。

問八　傍線部⑤「言文一致体」とあるが、本文全体を通じて、筆者は日本の近代における言文一致体小説の特徴をどう考えているか。その説明としてもっともふさわしいものを、次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　言文一致体小説は、西洋近代の自然主義文学の影響下で生じたものであり、固定的な三人称的視点からの叙述も、西洋文学に由来するものである。

イ　作中人物の心情は、純粋にその本人が感じているのではなく、原作者の視点を通してろ過される人間の心理描写だといえる。

ウ　写実小説を創作するためには客観性が重要であり、そのためには素材となる現実を余すところなく正確に描くことが不可欠である。

エ　全智である神の視点を用いて描くことによって、語り手は小説世界を隅々まで見通すことが可能となり、作品の写実性は高まる。

オ　日本の言文一致体小説は、西洋の自然主義小説の影響下にありながら、その語り方は日本語の特性に依存したものである。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

もうかなり前のことになるが、私は『ヒューマン　ボディ・ショップ』（アンドリュー・キンブレル著、化学同人刊）という書物を翻訳した。タイトルはヒューマン・ボディ（人体）とボディ・ショップ（自動車の板金・修理工場）が掛けてあり、［　I　］機械部品を修理交換するような感覚で、生命の「パーツ」が商品化され、操作されるに至った経緯と、主に米国の状況をルポルタージュしたものだった。

生命部品の商品化は売血という形で始まり、やがて臓器の売買、生殖医療を担う精子、卵子、受精卵、そして細胞へと波及していった。

現在、私たちは、遺伝子が特許化され、ES細胞が再生医療の切り札だと喧伝されるバイオテクノロジー全盛期の真っ只中にある。私たちが、ここまで生命をパーツの集合体として捉え、パーツが交換可能な一種のコモディティ（所有可能な物品）であると考えるに至った背景には明確な出発点がある。それがルネ・デカルトだった。

彼は、生命現象はすべて機械論的に説明可能だと考えた。心臓はポンプ、血管はチューブ、筋肉と関節はベルトと滑車、肺はふいご。すべてのボディ・パーツの仕組みは機械のアナロジーとして理解できる。そして、その運動は力学によって数学的に説明できる。自然は創造主を措定することなく解釈することができる――。

この考え方は瞬く間に当時のヨーロッパ中に感染した。そして、デカルトを信奉する者たち、すなわちカルティジアン（デカルト主義者）たちは、この考え方をさらに先鋭化していった。

デカルト主義者は言う。たとえば、イヌは時計と同じだ。打ちすえると声を発するのは身体の中のバネが軋（きし）む音にすぎない。イヌ自身は何も感じてはいないのだ。イヌには魂も意識もない。あるのは機械論的なメカニズムだけだ――。

デカルト主義者たちは進んで動物の生体解剖を行い、身体の仕組みを記述することに邁進した。デカルト本人は人間と動物との間に一線を画したが、カルティジアンの中には、やがてそれを乗り超える者たちが現れた。

十八世紀前半を生きたフランスの医師ラ・メトリー（唯物論の哲学者として知られている）は、人間を特別扱いする必然は何もなく、人間もまた機械論的に理解すべきものだとした。

現在の私たちもまた紛れもなく、この延長線上にある。生命を解体し、部品を交換し、発生を操作し、場合によっては商品化さえ行う。遺伝子に特許をとり、臓器を売買し、細胞を操作する。これらの営みの背景にデカルト的な、生命への機械論的な理解がある。

この考え方に立つ思考は現在、①一種の制度疲労に陥っていると私は思う。効率的な臓器移植を推進するために死の定義が前倒しされ、ES細胞確立の激しい先陣争いが繰り広げられることが、果たして私たちの未来を幸福なものにしてくれるのだろうか。

カルティジアンに対する新しいカウンター・フォースとして、私は今、二つの可能性を考えている。一つは生命が本来持っている動的な平衡、つまりイクイリブリアムの考え方を、生命と自然を捉える基本とすることである。

生命とは何か？

この永遠の問いに対して、過去さまざまな回答が試みられてきた。DNAの世紀だった二十世紀的な見方を採用すれば「生命とは自己複製可能なシステムである」との答えが得られる。確かに、これはとてもシンプルで機能的な定義であった。

しかし、この定義には、生命が持つもう一つの極めて重要な特性がうまく反映されていない。それは、生命が「可変的でありながらサスティナブル（永続的）なシステムである」という古くて新しい視点である。

二十一世紀、環境の世紀を迎えた今、生命と環境をめぐる思考の中にあって、この視点に再び光を当てることは、私たちに様々なヒントをもたらしてくれる。

生命が分子レベルにおいても（というよりもミクロなレベルではなおさら）、循環的でサスティナブルなシステムであることを、最初に「見た」のはルドルフ・シェーンハイマーだった。ＤＮＡの発見に先だつこと一〇年以上前（一九三〇年代後半から一九四〇年にかけて）のことだった。この、②生命観のコペルニクス的転回は、今ではすっかり忘れ去られた研究成果である。

日本が太平洋戦争にまさに突入せんとしていた頃、ユダヤ人科学者シェーンハイマーはナチス・ドイツから逃れて米国に亡命した。英語はあまり得意ではなかったが、どうにかニューヨークのコロンビア大学に研究者としての職を得た。

彼は、当時ちょうど手に入れることが出来たアイソトープ（同位体）を使って、アミノ酸に標識をつけた。そして、これをマウスに三日間、食べさせてみた。アイソトープ標識は分子の行方をトレースするのに好都合な目印となるのである。

アミノ酸はマウスの体内で燃やされてエネルギーとなり、燃えカスは呼気や尿となって速やかに排泄されるだろうと彼は予想した。結果は予想を鮮やかに裏切っていた。

標識アミノ酸は瞬く間にマウスの全身に散らばり、その半分以上が、脳、筋肉、消化管、肝臓、膵臓、脾臓、血液などありとあらゆる臓器や組織を構成するタンパク質の一部となっていたのである。そして、三日の間、マウスの体重は増えていなかった。

これはいったい何を意味しているのか。マウスの身体を構成していたタンパク質は、三日間のうちに、食事由来のアミノ酸に置き換えられ、その分、身体を構成していたタンパク質は捨てられたということである。

標識アミノ酸は、ちょうどインクを川に垂らしたように、「流れ」の存在とその速さを目に見えるものにしてくれたのである。つまり、私たちの生命を構成している分子は、プラモデルのような静的なパーツではなく、例外なく絶え間ない分解と再構成のダイナミズムの中にあるという画期的な大発見がこの時なされたのだった。

まったく比喩ではなく、生命は行く川のごとく流れの中にあり、私たちが食べ続けなければならない理由は、この流れを止めないためだったのだ。そして、さらに重要なのは、この分子の流れが、流れながらも全体として秩序を維持するため、相互に関係性を保っているということだった。

個体は、感覚としては外界と隔てられた実体として存在するように思える。しかし、ミクロのレベルでは、たまたまそこに密度が高まっている分子のゆるい「淀み」でしかないのである。

生体を構成している分子は、すべて高速で分解され、食物として摂取した分子と置き換えられている。身体のあらゆる組織や細胞の中身はこうして常に作り変えられ、更新され続けているのである。

だから、私たちの身体は分子的な実体としては、数ヵ月前の自分とはまったく別物になっている。分子は環境からやってきて、一時、淀みとしての私たちを作り出し、次の瞬間にはまた環境へと解き放たれていく。

つまり、環境は常に私たちの身体の中を通り抜けている。

A

シェーンハイマーは、この生命の特異的なありようを「動的な平衡」という素敵な名前をつけた。

ここで私たちは改めて「生命とは何か？」という問いに答えることができる。「生命とは動的な平衡状態にあるシステムである」という回答である。

そして、ここにはもう一つの重要な啓示がある。それは可変的でサスティナブルを特徴とする生命というシステムは、その物質的構造基盤、つまり構成分子そのものに依存しているのではなく、その流れがもたらす「効果」であるということだ。③生命現象とは構造ではなく「効果」なのである。

サスティナブルであることを考えるとき、これは多くのことをa示唆してくれる。サスティナブルなものは常に動いている。その動きは「流れ」、もしくは環境との大循環の輪の中にある。サスティナブルは流れながらも、

環境との間に一定の平衡状態を保っている。

一輪車に乗ってバランスを保つときのように、［Ⅱ］小刻みに動いているからこそ、平衡を維持できるのだ。サスティナブルは、動きながら常に分解と再生を繰り返し、自分を作り替えている。それゆえに環境の変化に適応でき、また自分の傷を癒すことができる。

このように考えると、サスティナブルであることとは、何かを物質的・制度的に保存したり、死守したりすることではないのがおのずと知れる。

サスティナブルなものは、一見、不変のように見えて、実は常に動きながら平衡を保ち、かつわずかながら変化し続けている。その軌跡と運動のあり方を、ずっと後になって「進化」と呼べることに、私たちは気づくのだ。

シェーンハイマーは、それまでのデカルト的な機械論的生命観に対して、還元論的な分子レベルの解像度を保ちながら、コペルニクス的転換をもたらした。その業績はある意味で二十世紀最大の科学的発見と呼ぶことができると私は思う。

［Ⅲ］、皮肉にも、このとき同じニューヨークにいた、ロックフェラー大のエイブリーによって遺伝物質としての核酸が発見された。そして、それが複製メカニズムを内包する二重らせんをとっていることが明らかにされ、分子生物学時代の幕が切って落とされる。

生命と生命観に関して偉大な業績を上げたにもかかわらず、シェーンハイマーの名は次第に歴史の澱（おり）に沈んでいった。

それと軌を一にして、再び、生命はミクロな分子パーツからなる精巧なプラモデルとして捉えられ、それを操作対象として扱いうるという考え方がドミナントになっていく。必然として、流れながらも関係性を保つ動的な平衡系としての生命観は捨象されていった。

ひるがえって今日、外的世界としての環境と、内的世界としての生命とを操作しつづける科学・技術のあり方をめぐって、私たちは重大な岐路に立たされている。

シェーンハイマーの動的平衡論に立ち返って、これらの諸問題を今一度、見直してみることは、b閉塞しがちな私たちの生命観・環境観に古くて新しいヒントを与えてくれるのではないだろうか。

なぜなら、彼の理論を拡張すれば、環境にあるすべての分子は、私たち生命体の中を通り抜け、また環境へと戻る大循環の流れの中にあり、どの局面をとっても、そこには平衡を保ったネットワークが存在していると考えられるからである。

平衡状態にあるネットワークの一部分を切り取って他の部分と入れ換えたり、局所的な加速を行うことは、一見、効率を高めているかのように見えて、結局は平衡系に負荷をあたえ、流れを乱すことに帰結する。

実質的に同等に見える部分部分は、それぞれが置かれている動的な平衡系の中でのみ、その意味と機能をもち、機能単位と見える部分にもその実、境界線はない。

遺伝子組み換え技術は期待されたほど農産物の増収につながらず、臓器移植はいまだ決定的に有効と言えるほどの延命医療とはなっていない。ES細胞の分化機構は未知で、増殖を制御できず、奇跡的に作出されたクローン羊ドリーは早死にしてしまった。

こうした数々の事例は、バイオテクノロジーの過渡期性を意味しているのではなく、動的な平衡系としての生命を機械論的に操作するという営為の不可能性を証明しているように、私には思えてならない。

（福岡伸一『動的平衡』の文章による）

問九　波線部**a**「示唆」、波線部**b**「閉塞」の読みを**カタカナ**で記せ。

問十　空欄［Ⅰ］～空欄［Ⅲ］に当てはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次の**ア～キ**の中から**一つ**ずつ選び、その記号を記せ（同じ記号は一度しか使えない）。

ア　しかし　　**イ**　そして　　**ウ**　だから　　**エ**　むしろ

オ　あたかも　　**カ**　ところで　　**キ**　とはいえ

問十一　傍線部①「一種の制度疲労に陥っている」とはどういうことか。その説明としてもっともふさわしいものを、次の**ア～オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　一部の生物を限定的に機械のごとく扱っているため、自然界における生態系の中で各生物間の生命の価値が不均一になっていること。

イ　科学の研究が哲学における認識論に応用されたため、生命創造の神聖性に新たな疑念が生まれたこと。

ウ　生命は部品のように操作できるという理解が枠組みとして存在するために、その先入観による弊害が生じていること。

エ　機械論的な理解は、伝統的で根強い生命観ではあるが、最新の知見によって既に乗り越えられつつあるということ。

オ　生命を操作する考えから、さまざまな成果が生じたが、あらゆる実験が行われた結果、することがなくなっているということ。

問十二　傍線部②「生命観のコペルニクス的転回」の具体的内容が示されている部分（七十字～八十字）を、本文中から抜き出し、最初と最後の**五字**を記せ（句読点などがある場合はそれを含む）。

問十三　空欄［A］には次のⅠ～Ⅴの文が入る。文意が通るように並べ替えるとどのようになるか、次の**ア～エ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

Ⅰ　いや「通り抜ける」という表現も正確ではない。

Ⅱ　つまり、そこにあるのは、流れそのものでしかない。

Ⅲ　その流れ自体が「生きている」ということなのである。

Ⅳ　その流れの中で、私たちの身体は変わりつつ、かろうじて一定の状態を保っている。

Ⅴ　なぜなら、そこには分子が「通り過ぎる」べき容れ物があったわけではなく、ここで容れ物と呼んでいる私たちの身体自体も「通り過ぎつつある」分子が、一時的に形作っているにすぎないからである。

ア　Ⅰ→Ⅱ→Ⅳ→Ⅲ→Ⅴ

イ　Ⅰ→Ⅴ→Ⅱ→Ⅳ→Ⅲ

ウ　Ⅱ→Ⅰ→Ⅲ→Ⅳ→Ⅴ

エ　Ⅱ→Ⅳ→Ⅰ→Ⅴ→Ⅲ

問十四　傍線部③「生命現象とは構造ではなく「効果」なのである」とはどういうことか。その説明としてもっともふさわしいものを、次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　生命は、それを構成する分子に依存しているのではなく、つねに置き換えがはかられている分子とともに変化を繰り返すことによってバランスが保たれているということ。

イ　生物は、自分自身の生命を存続させるために、自己の内部の分子の構造をみずから再構成しつつ、同時に外界の環境に対しても生存に適合するものとなるよう働きかけを行っているということ。

ウ　生物の身体の存続は、持って生まれた物質的構造基盤に支配されたり制限されたりするものではなく、いかに効率的に食物を選び、分子の働きをよくするかにかかっているということ。

エ　生命は、その容れ物としての身体を通り過ぎるさまざまな分子が置き換わっていくことによってサスティナブルなものとなっているということ。

オ　生命としての身体は、環境の中で、食物として摂取した分子を取り込みながら確立されていくものであるということ。

問十五　本文の内容と合致するものを次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　遺伝子組み換え技術や臓器移植などの新技術は、分子生物学の発展がもたらした、人類にとってもっとも有効かつ有望なものである。

イ　科学の進歩に伴って機械論的生命観が現れ、ミクロレベルでの物質循環により、生命は環境との間に永続的な平衡系を作り出すことが解明された。

ウ　生命を部品によって成り立つ物品とする現代の考え方を導くことこそがデカルトの真意であった。

エ　シェーンハイマーの業績は、機械論的な生命観に対するアンチテーゼであり、生命と生命観に関する現在の諸問題を見直す視座を含むものである。

オ　動的平衡系として生命をとらえる観点は、行き詰まった現在のクローン技術に画期的な進歩と変革をもたらした。

〔以下余白〕

<H29112081>

受験番号	万	千	百	十	一
カナ氏名					
氏名					

（所定欄以外に番号・氏名を書いてはならない）

2017年度

国　語

（解答用紙）

No. 1 ／ 2

採点欄

一

問一
a
b

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

（この線で二つ折りにして書きなさい）

2017年度

国　語

（解答用紙）

No. 2 ／ 2

採点欄

二

問九
a
b

問十
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ

問十一

問十二
ʃ

問十三

問十四

問十五

（裏面使用不可）